

自閉症児の要求言語行動の援助に関する事例研究

ー ビデオモニターによる場面認識の向上と表現スクリプト ー

A case study of educational assistance with a videotape monitoring
for requirement expressions of an autistic child

山本 美知子

YAMAMOTO Michiko
(AMUS 個別指導教室)

江田 裕介

EDA Yusuke
(和歌山大学教育学部)

自閉症児のコミュニケーション支援の方法として、ビデオモニターによる場面理解と表現スクリプトの適用を試み、その効果を検証した。対象児本人が過去の自分の活動をモニターし、スクリプトとして整理することで、場面理解の向上を図った。また母親と共にビデオモニターを行い、母親の言葉かけや、接し方に対して助言を行った。その経過における発話内容の変化や、母子それぞれの発話回数・内容の変化を分析した。その結果、対象児はビデオモニターによって自分の行動を切り出すことが可能になり、スクリプトの視覚化により行動の系列を理解することで、要求言語の有意な増加につながった。しかし、文脈の意味理解にまでは至らなかった。また母親がビデオモニターにより自身の言葉かけにおける問題点を把握し、対応が変わることで親子間の会話が成立する場面も増加した。

キーワード：自閉症、ビデオモニター、スクリプト、日常生活場面、母親支援

1. 問題

自閉性障害は American Psychiatric Association (1994) の DSM-IV『精神疾患の分類と手引き』によると、(1) 対人的相互反応による質的な障害、(2) 意思伝達の質的な障害、(3) 行動や興味の限局という三つの症状の存在が診断基準となっている。その中で意思伝達の質的な障害として自閉症児の言語特徴が具体的に記載されている。また、視線や表情、身ぶりといった非言語の対人的相互反応は、コミュニケーションの基盤となるものであり、言語と非言語の両面でコミュニケーションの問題が自閉症児における障害の基本的症状であることがわかる。また、自閉症は特徴的な行動によって診断される症候群であり、その特徴には個人差が大きく、話し言葉を持たない重度の精神遅滞をとまなう者から、知的に高い機能をもつ者まで幅を持ってとらえられている(西村, 2001; 杉山, 2005)。言語は、認知や社会情緒的発達と相互に関係しながら発達するため、発達のばらつきを広く抱えている自閉症の言語は、障害も広くとらえられる(Tager-Flusberg, 1994; 長崎, 1998; 石坂

, 1998)。

こうした自閉症児にとって、コミュニケーション支援は社会適応のためにも重要な課題となる(高橋, 1997; 大井, 2004)。その支援を具体的に考えるとき、自閉症児はとりわけ伝達の側面(語用論機能、会話能力、ものの言い方)に問題を抱えているといわれ(Tager-Flusberg, 1994; 西村, 1998; Schopler, 1985)、多様な語用論的アプローチが言語支援の方法として提唱されるようになった。

語用を困難とする要素の一つとして、自閉症児は関係を意味する語を適切に使いこなすことが非常に難しく、文脈の読み取りが困難であることが挙げられる。その弱さに対して、スクリプトによる支援が考えられている(長崎, 1998)。

スクリプトは日常生活場面における特定の文脈の行為の系列に関するフレームの知識構造(Greene, 1990)であり、スクリプトがそれを獲得する過程において、そのスクリプトの要素に対応した、言語の意味、伝達意図の理解と表出が平行して行われると考えられている(長崎, 1994)。

また、自己理解の弱さに対しては、ビデオ視聴により自己に注意を向け、知覚像と内的イメージのずれを自覚化させる(Buss, 1980)と言われ、自己をビデオモニターして、自己理解を促進させる支援が考えられる。

さらに自閉症児は、構造化された指導場面で習得した言語の般化が困難であることが指摘されているが、(出口・山本, 1985; 杉山, 1987; 長崎, 1998; 大井, 2004)、言葉の獲得のためには、日常生活の中で対人、対物関係の土台をしっかりと築くことが大切であり(小椋, 1997)、また日常生活場面での動機付けを喚起しやすいプログラムを提供するなど日常的言語指導法が提唱されている(Koegel, 1994)。また家庭との協力は不可欠である(Koegel, 1995; 西村, 1998)と言われるが、自閉症児の親は、子どもの要求内容を文脈から先取的に関わるが多く、その家族の状況やニーズに合わせた親教育プログラム(Koegel, 1995)が必要となる。

2. 目的

本研究では、自閉症児の要求言語行動を援助するため、臨床的に有効な方法を検討する。

具体的には、自閉症児の一事例の家庭指導において対話の場面や文脈理解のためにスクリプトを利用し、また自己理解のためのビデオモニターを実施する。

- (1) スクリプトにより場面や文脈の理解が深まるか
- (2) ビデオモニターにより、自己理解が深まるか
- (3) 生活文脈の中で調理作業を行うことで発話が促進されるのか
- (4) 母子の関係性を支援することで、母子の会話は変化するか

これらの結果の分析を通して、自閉症児の行動や認知の特性に即したコミュニケーション支援のあり方を考察する。

3. 研究方法

3.1. 対象者

対象児 男子 15 歳 3 ヶ月 (研究開始時)

養護学校中学部 3 年

診断名: 自閉症

知能検査結果: WISC-III 全検査 IQ54

言語性 IQ46 動作性 IQ72

群指数 (言語理解 50 未満・知覚統合 79・

注意記憶 65・処理速度 52)

コミュニケーションの状態: 学校では、特定の友達に興味を示すが、わざとぶつかる、追い掛け回す等で、相手から拒否されると物に当たる行動も見られた。注意されると、「もうしません」と言いながら、同じ行動を繰り返している。家庭では、思い通りにな

らず、いらいらした時は、パターン言語や質問を繰り返し返し母親が困ることが多い。言葉で自分の気持ちを表現することが難しく、また「教えて下さい」と言えるが、内容を説明できない等、言語・コミュニケーションの問題が多い。

また思春期を迎えた対象児に対し、指示が多い母親の言葉かけを考え直し、対象児の思いや発達を理解した上での親子関係の見直しが必要である。

3.2. 研究計画

(1) 調理場面における母子の会話を各期 5 セッション、ビデオに記録する。

1 期—ベースライン期 母子 2 名で調理する。

支援・アドバイスは行わず、ビデオ記録のみ行う。

2 期—調理実施前に、母子で前回のビデオモニターを行い、支援・アドバイスは行わない。

3 期—前回のビデオモニターしながら母親指導を行い、その後母子で調理を行う。

4 期—ビデオモニターしながら対象児のスクリプト作成及び言語支援を行う。その後母子調理を行う。

(2) 具体的な支援

1 期—ビデオ記録・観察のみ行う。

2 期—ビデオ映像を見せる。ビデオ記録を行う。

3 期—母親支援を行い、その後ビデオ記録を行う。

1) 母親の良い関わり方の承認・賞賛

2) 対象児のことばの意味にとらわれない・気持ちの理解・受容

3) 具体的な関わり方 (指示を少なく・言動を待つ)

4 期—対象児指導を行う。ビデオ記録を行う。

1) ビデオモニターと質問による自己理解

2) ビデオモニターによる調理スクリプト表の作成

3) 質問方法の確認

・材料の数量に関する質問 (何個ですか・何杯ですか・どのくらいですか・・・)

・方法の教示要求—動詞の名詞化 (切る→切り方・開ける→開け方教えて下さい・・・)

3.3. 評価の手続き

(1) 対象児の発話内容の変化

1) ビデオにより母子の会話を記録する。

2) 対象児の発話内容をカテゴリに分類する。(2 名によるビデオ分析) カテゴリは Table 1 に示したように、I 鼻歌、II パターン発話、III 一次感情発話 (①反復・連想②よびかけ・相槌③感情)、IV 作業にともなった発話 (①実行・確認②報告③感想・状況説明)、V やりとり発話 (①応答・自答②意思・感想③要求) である。

3) 各カテゴリの発話回数をセッションごとに集計する。

- 4) 発話内容分類項目 I～V を 1 期から 4 期の 4 水準に分け、分散分析を行う。
 - 1. 対象児の発話内容分類項目の変化
 - 2. 対象児の発話内容分類下位項目の変化
- (2) 対象児と母親の発話回数の変化その相関
- (3) 母子の会話記録の分析
- (4) 質的な変化

4. 結果

4.1 対象児の発話内容の変化

発話内容をカテゴリごとに集計し、それぞれ各期の発話回数の平均を算出し、分析を行った。その結果を (Table 1) に表す。

4 期を 4 水準に分け、分散分析を行った。その結果を表に示す (Table 2)。

(1) 対象児の発話内容分類項目の変化

発話内容分類項目において変化がみられたのは、IV 作業にともなった発話、V やりとり発話であり、1 期 2 期に比べ、3 期 4 期が 5% 水準で有意に増加した。(Fig. 1)

(2) 対象児の発話内容分類下位項目の変化

発話内容分類項目の下位項目で変化があったのが、IV 作業にともなった発話の①実行・確認が 1 期 2 期に比較し、3 期 4 期が 5% 水準で有意に増加し、②報告が 1 期 2 期に比べ、3 期が 5% 水準で有意に増加した。そのグラフを示す (Fig. 2)。

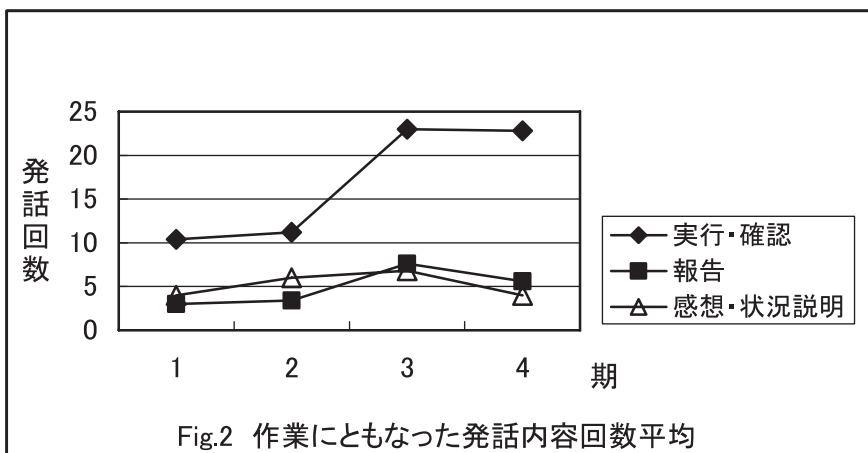
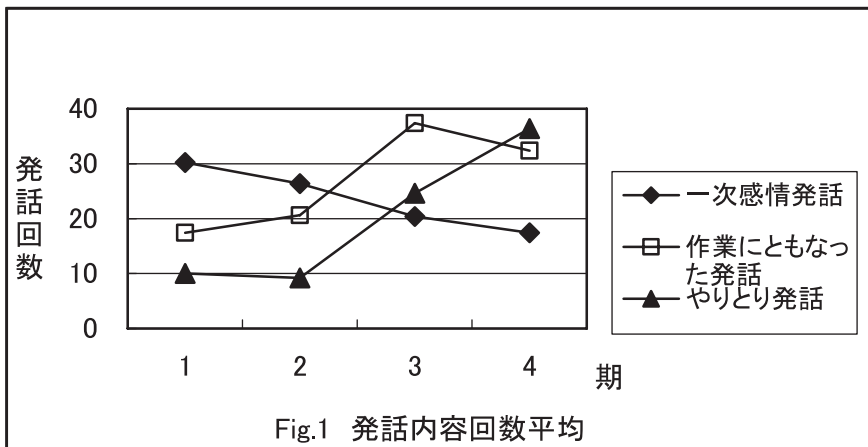
また V やりとり発話の①応答・自答が 1 期 2 期に比較し、3 期 4 期が 5% 水準で有意に増加し、③要求 (教示・情報・許諾) が 1 期 2 期 3 期に比較し、4 期が 5% 水準で有意に増加した。そのグラフを示す (Fig. 3)。

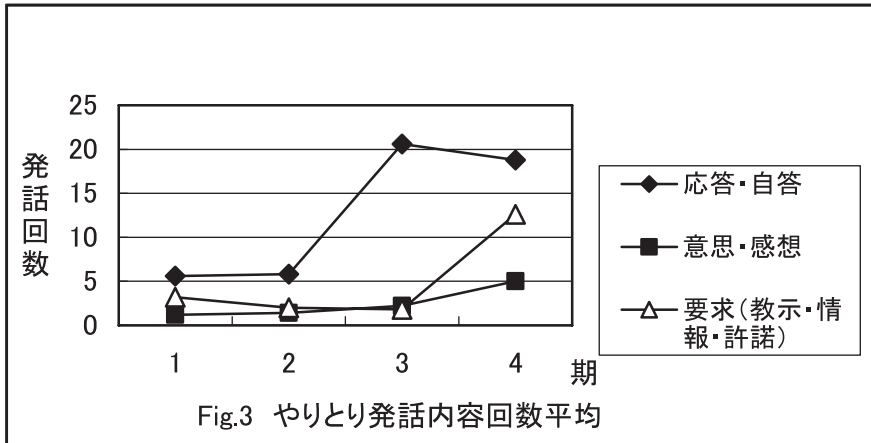
(Table 1) 対象児発話内容の分類と発話回数平均と標準偏差<開始時より 15 分間>

		I 鼻 歌	II パ タ ン 発 話	III 一次感情発話				IV 作業に伴った発話				V やりとり発話			
				① 反 復 ・ 連 想	② よ び か け ・ 相 槌	③ 感 情	合 計	① 実 行 ・ 確 認	② 報 告	③ 感 想 ・ 状 況 説 明	合 計	① 応 答 ・ 自 答	② 意 思 ・ 感 想	③ 要 求	合 計
1 期	M	7.2	15.8	7.6	19.6	3	30.2	10.4	3	4	17.4	5.6	1.2	3.2	10.0
	SD	2.8	9.8	4.1	6.7	3	9.8	4.9	1.4	1.7	5.1	2.1	1	1.3	2.4
2 期	M	9.6	24.4	4.6	17.2	4.6	26.4	11.2	3.4	6	20.6	5.8	1.4	2	9.2
	SD	4.5	7.9	5.4	6.9	4.2	7.3	5.1	3	2.4	6.2	4.1	1	1.7	3.5
3 期	M	9.4	28.8	7.4	12.6	0.4	20.4	23	7.6	6.8	37.4	20.6	2.2	1.8	24.6
	SD	4	14.9	4.4	7.9	0.8	8.4	5.8	2.7	4.7	8.9	1.2	1.6	1.2	2.6
4 期	M	5.2	25.2	5	9.8	2.6	17.4	22.8	5.6	4	32.4	18.8	5	12.6	36.4
	SD	2	7.1	2.8	4.9	2.4	3	6	2.7	2.3	8.4	7.1	7.1	6.2	18.5

(Table 1) 対象児発話内容の分類と発話回数平均と標準偏差<開始時より15分間>

I 鼻歌	n. s.	
II パターン発話	n. s.	
III 一次感情発話	① 反復・連想	n. s.
	② よびかけ・あいづち	n. s.
	③ 感情	n. s.
IV 作業に ともなった発話	A1・A2 < A3・A4 *	
	① 実行・確認	A1・A2 < A3・A4 *
	② 報告	A1・A2 < A3 *
	③ 感想・状況説明	n. s.
V やりとり発話	A1・A2 < A3・A4 *	
	① 応答・自答	A1・A2 < A3・A4 *
	② 感想・意思	n. s.
	③ 要求 (教示・情報・許諾)	A1・A2・A3 < A4 *





4.2. 母子の発話回数の変化とその相関

対象児の発話回数が、母親の発話回数によって変化するのか、発話回数を集計し比較した。発話回数比較表を Table 3 に示す。対象児と母親の発話回数変化のグラフを Fig. 4 に示す。

対象児の発話回数の分散分析を行ったところ、1期2期に比べ、3期4期が5%水準で有意に増加し

た。これは、3期の母親支援で、母親が発話回数を減らし、対象児の発話を待ったこと、また4期の対象児に対するスクリプト、質問方法の確認の支援に効果があったと言える。

また対象児と母親の発話回数の相関を調べるため、相関分析を行った。その結果、負の相関に有意傾向があった。(Table 4) に示す。

(Table 3) 母子の発話回数比較表

<開始から10分間>

1 期			2 期				
	対象児	母親	合計		対象児	母親	合計
No.1	42	111	153	No.6	45	112	112
No.2	42	149	191	No.7	28	137	165
No.3	18	148	166	No.8	42	70	112
No.4	40	112	152	No.9	27	104	131
No.5	43	132	175	No.10	39	69	108
合計	185	652	837	合計	181	492	673
平均	37	130.4	167.4	平均	36.2	98.4	134.6
割合	22.1%	77.9%	100%	割合	26.9%	73.1%	100%
3 期			4 期				
	対象児	母親	合計		対象児	母親	合計
No.11	61	61	122	No.16	98	112	210
No.12	57	99	156	No.17	80	69	149
No.13	53	58	111	No.18	69	79	148
No.14	63	127	190	No.19	71	47	118
No.15	71	91	162	No.20	54	61	115
合計	305	436	741	合計	372	368	740
平均	61	87.2	148.2	平均	74.4	73.6	148
割合	41.2%	58.8%	100%	割合	50.3%	49.7%	100%

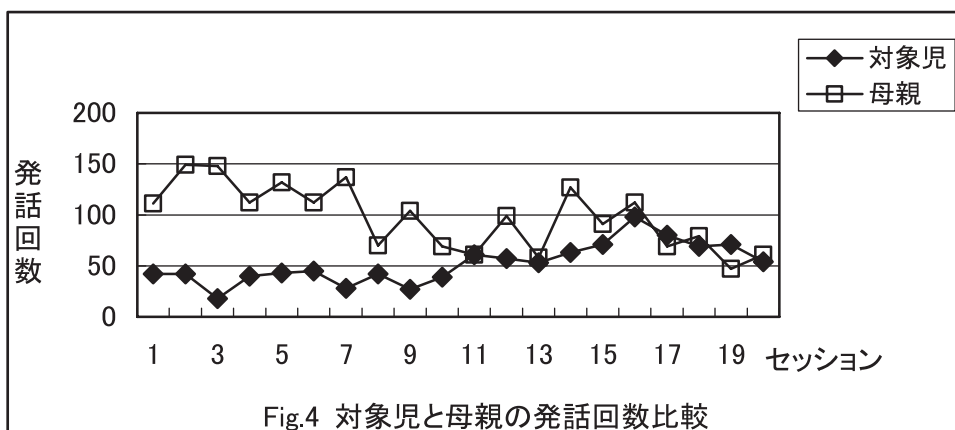


Table 4-1 対象児と母親の発話回数 N=20

	Mean	SD
対象児	52.2	19.0
母親	97.4	31.0

Table 4-2 対象児と母親の発話回数の相関

df = 1 & 18

Var.	r.	F	Test
A1 × A2	-0.43	4.05	+

+ p<.10 * p<.05 ** p<.01

4.3. 母子の会話記録の分析

対象児の「M君赤ちゃん投げました」という発話からの会話を10パターンと母親からの質問から始まった会話を2パターン記録し、分析した。

母親は対象児の「M君赤ちゃん投げました」という発話を2期までは否定していたが、発話内容は、怒りの気持ちの表現であることを3期の母親支援で説明した。母親が否定せず、受容し、気持ちに共感するとやりとりの会話となった。

4.4. 質的な変化

母親は3期のビデオモニターと母親支援により、自分と対象児を見直し、できるだけ対象児に任せて、指示を少なくすること、発話を意味としてとらえず共感し、対象児の頑張りを認めるようになった。

4期の対象児支援では、ビデオモニターによる感想が言葉では聞かれなかったが、質問に「たのしかった」「かたがつかれた」「やりたい」と書字することができた。

ビデオモニターしながらのスク립ト表作成は、行動を一つずつ切り取ることができたが、時々見逃すことがあり、質問をする必要があった。

5. 考察

5.1. スクリプトと

発話内容分類項目Vやりとり発話(③要求)の変化

分散分析の結果1, 2, 3期に比較し、4期が5%水準で有意に増加した。

4期に対象児が自発的に調理に取り組む言動が見られ、調理スクリプト表により行動の系列を理解したと考えられる。それは書字による視覚化によって行動の系列が整理され、自主的な言語行動や要求発話につながったと思われる。Grandin (1995) の「書いたほうが理解しやすい」という説明にも一致する結果である。また質問方法の確認や要求教示における動詞の名詞化も要求発話の増加につながったと考えられる。

しかし、調理スクリプト表を見ないと順番が入れ替わったり、抜かしたりすることがあり、行動の系列記憶である頭の中のスクリプトが一つずつばらばらで、行動としての意味系列になっていない、スクリプトを自分の中で意味として構造化できていないことが考えられる。谷口 (1998) は「発達障害児は環境変化を的確に検出し、必要な情報を抽出して場面の意味を読み取り、その環境変化に合わせて自己の行動を統制し、されにその事態の流れをスクリプトとして蓄積(記憶、学習)することに困難がある」と述べている。今後対象児が頭の中でスクリプトとして記憶し、またそれを使って他の場面への般化するためには、対象児にとっての迫真的な単位を考えたり、他の文脈との関係性を考えさせる支援(米澤, 2005 私信)が必要となる。

5.2. ビデオモニターによる自己理解と

発話内容分類項目感情の変化

発話内容の感情に関わる項目に1期から4期まで有意な変化が見られなかった。

対象児はビデオモニターにより自分の姿を視聴しても、言葉で感想を述べることはなかった。自己のイメージをもっていないため、画面の自分との比較が困難であったと思われる。しかし、書字で質問に答える形では、「りょうりがすきです」「にこっとしてました」「おかあさんとKくんとりょうりがうれしいです」と書くことができた。

また対象児と母親が感情をともなったやりとりをする場面がみられたが、1期から4期まで対象児の感情の発話は少なく、有意な変化がみられなかった。自閉症児は感情表出に問題があり、自分と他者の情動を比較する初期段階の欠損(Mundy&Sigman, 1989)や自他の境界があいまいであり、自他理解を促進させる機会が少ない(遠藤, 1996)などが考えられる。今後は多様な場面での自分をビデオモニターし、自己像を比較させる支援なども考えられる。

5.3. 生活文脈の中での作業と

発話内容分類項目IV作業にともなった発話の変化

IV作業にともなった発話(①実行・確認)が1期2期より3期4期が5%水準で有意に増加した。(②報告)は1期2期に比べ3期が5%水準で有意に増加した。

3期に母親の対象児に対する指示のことばが母親支援において減少すると、対象児が作業をすすめるために実行・確認・報告の発話が増加したと考えられる。報告が4期において減少したのは、調理スクリプト表によって、確かめることが可能となり、母親に対する報告が減ったと思われる。また、作業にともなって言葉が増加したのは、言語の発生と発達は動作から動作への転移である(Bruner, 1976)と記述されているように、作業にともなって言葉が発生し、調理という場面設定で発話が促進されたことが考えられる。しかし反面、確認行動が習慣化し、作業の前に確認をし、母親の返事がないと次へ進めないという傾向が見られた。自主的な行動のための今後の支援としては、自分で考え行動する機会を増やす、母親は上手にできなくても対象児に任すなどが、必要となる。

5.4. 母子の関係性の支援と

母子の発話回数の相関と発話内容変化

対象児の発話回数は1期2期に比べ、3期4期が5%水準で有意に増加した。

母子の発話回数は相関分析の結果、負の相関傾向にとどまった。

母親支援により母親の指示のことばが減ると、対象児の作業・確認のことばが増えたが、反面、母親の対象児とのやりとりを引き出すことばかけが減ると、母子共に発話数が減少する傾向が見られた。これはやりとりをする会話は相互作用で正の相関の面もあり、母子の発話回数は負の相関の有意傾向にとどまったと考えられる。母親が3期の母子支援により、対象児のパターン発話の意味にとらわれず、受容すると、対象児も意思を表明し、新しい情報をつけ加えるなどのやりとりとなった。障害児の言語は受け手の対応で大きく変わり、またその文脈の起源がわかった時に理解できる(Kanner, 1972; 小林, 2004)のである。しかし、子どもの話したいことと無関係な応答は効果を上げない(大井, 2001)と言われるように母親からの質問には興味がなく、やりとりの会話にならなかった。

長崎は(1994)日常生活の文脈こそが言語を獲得する舞台となり、そこでの養育者や大人の関わり方が言語の獲得を援助すると述べているが、本研究からも日常生活場面での母子の作業と関係性を見直した母親の関わりによって対象児の発話回数が増え、会話が成立したと考えられる。

6. 引用文献

- 1) American Psychiatric Association (1994) : Diagnostic criteria from DSM-IV. 高橋三郎・大野裕・染矢俊幸訳. DSM-IV 精神疾患の分類と診断の手引き. 医学書院.
- 2) 別府哲 (2003) : 自閉症児は他者の心をどのようにして理解するのか. 特殊教育学研究, 41(2), 279-283.
- 3) 別府哲 (2001) : 自閉症児の他者理解. ナカニシヤ出版.
- 4) 別府哲 (2001) : 第2章自閉症と広汎性発達障害. 西村辨作編. ことばの障害入門. 大修館書店.
- 5) Bransford, J. D., Brown, A. L. & Cocking, R. R. (2000) : How people learn. 森敏昭・秋田喜代美監訳・21世紀の認知心理学を創る会訳, 授業を変えるー認知心理学のさらなる挑戦ー. 北大路書房.
- 6) 出口光・山本淳一 (1985) : 機会利用型指導法とその汎用性の拡大ー機能的言語の教授法に関する考察ー. 教育心理学研究, 33(4), 350-360.
- 7) 遠藤利彦 (1996) : 乳幼児期における自己と他者, そして心ー関係性, 自他の理解, および心の理論の関係性を探るー. 心理学評論, 40(1), 57-77.
- 8) 遠藤利彦 (2005) : 読む目・読まれる目ー視線理解の進化と発達の心理学ー. 東京大学出版会.
- 9) 藤金倫徳 (1992) : 要求言語の自発的使用促進に関する研究ー選択要求言語の刺激統制の転移ー. 特殊教育学研究, 30(2), 13-21.
- 10) Gibson, J. J. (1980) : The ecological approach visual perception. 古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬旻訳, ギブソン, 生態学的視覚論ーヒトの知覚世界を探る. サイエンス社.
- 11) Grandin, T. (1995) : Thinking in pictures. カニングハム久子訳. 自閉症の才能開発. 学習研究社.
- 12) Greene, J. (1990) : Language understanding : A cognitive approach. 長町三生監修, 認知科学研究会訳, 言語理解. 海文堂.
- 13) Hobson, R. P. (1933) Autism and the development of mind. Psychology Press. 木下孝司監訳, 自閉症と心の発達. 学苑社.
- 14) 石坂好樹 (1998) : 自閉症の基礎障害は認知障害かーモジュール学説との関連によるー考察ー. 児童青年精神医学とその近接領域, 39(4), 321-329.
- 15) 伊東裕司 (1999) : フレーム項目. 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁樹算男・立花政夫・箱田裕司編集. 心理学辞典. 有斐閣.
- 16) Koegel, R. L. & Johnson, J. (1994) : Autism nature diagnosis and treatment. 野村東助・清水康夫監訳, 自閉症ーその本態, 診断および治療ー. 第13章自閉症児の言葉を使う意欲を高める. 日本文化科学社.
- 17) Koegel, R. L. & Koegel, L. K. (1995) : Teaching children with autism, Strategies for initiating positive interactions and improving learning opportunities. 氏森英亜・清水直治監訳, 自閉症児の発達と教育ー積極的な相互交渉をうながし, 学習機会を改善する方略ー. 二瓶社.
- 18) 木下孝司 (2001) : 遅延提示された自己映像に関する幼児の理解ー自己認知・時間的視点・「心の理論」の関連ー. 発達心理学研究, 12(3), 185-194.
- 19) 小林隆児 (2004) : 自閉症とことばの成り立ちー関係発達臨床からみた原初的コミュニケーションの世界ー. ミネルヴァ書房.
- 20) 小山 正 (2002) : 言語獲得の発達の基盤. 特殊教育学研究, 40(2), 271-279.
- 21) Mesibov, C. B., Adams, L. W. & Klinger, L. G. (1998) : Autism understanding the disorder. 佃一郎監訳, 岩田まな訳, 自閉症の理解. 学苑社.
- 22) 三嶋唯義 (1976) : ピアジェとブルーナーー発達と学習の心理学ー. 誠文堂新光社.
- 23) 長崎勤 (1994) : 言語指導における語用論的アプローチー言語獲得における文脈の役割と文脈を形成する大人と子どもの共同行為ー. 特殊教育学研究, 32(2), 79-84.
- 24) 長崎 勤・佐竹真次 (1998) スクリプトによるコミュニケーション指導ー障害児との豊かなかわりづくりをめざしてー. 川島書店.
- 25) 長沢正樹・森島慧 (1992) : 機能的言語指導法による自閉症児の要求言語行動の獲得. 特殊教育学研究, 29(4), 77-81.
- 26) 西村辨作 (1998) : 第2章自閉症児のことばの問題. 笹沼澄子監修・大石敬子編. 子どものコミュニケーション障害. 大修館書店
- 27) 西村辨作 (1999) : 発達に遅れをもつ子どものいる家族. 聴能言語学研究, 16, 115-121.
- 28) 小椋たみ子 (1997) : 第8章障害児のことばの発達. 小林春美・佐々木正人編. 子どもたちの言語獲得. 大修館書店.
- 29) 小椋たみ子 (2002) : 第4章言語獲得ー社会的基盤と認知的基盤ー. Kの会編. 心理学の方法. ナカニシヤ出版.
- 30) 大井学 (2001) : 第5章 語用論的アプローチ. 大石敬子編. ことばの障害の評価と指導. 大修館書店.

- 31) 大井 学 (2004) : 高機能広汎性発達障害をもつ人のコミュニケーション支援—語用障害とその補償—. 障害者問題研究, 32(2), 22-29.
- 32) 太田昌孝・永井洋子 (1992) : 認知発達治療の実践マニュアル—自閉症の Stage 別発達課題—. 日本文化科学社.
- 33) Prizant, B. M. (1994) : Autism nature diagnosis and treatment. 野村東助・清水康夫監訳, 自閉症—その本態, 診断および治療—. 第12章自閉症者の言語とコミュニケーション機能を高める—理論から実践へ—. 日本文化科学社.
- 34) 佐々木正美 (1980) : 自閉症児の学習指導, 脳機能の統合訓練をめざして. 学習研究社.
- 35) Schank, R. C. (1984) : The cognitive computer. 渕一博監訳・石崎俊訳. 考えるコンピュータ. ダイヤモンド社.
- 36) Schopler, E., Olley, J. G. & Lansing, M. D. (1985) : TEACCH program. 佐々木正美・大井英子・青山均訳. 自閉症の治療教育プログラム. ぶどう社.
- 37) 関戸英紀 (1996) : 自閉症児における書字を用いた要求言語行動の形成とその般化促進—物品, 人, および社会的機能の般化を中心に—. 特殊教育学研究, 34(2), 1-10.
- 38) 杉山登志郎 (2000) : 自閉症の体験世界—高機能自閉症の臨床研究から—. 小児の精神と神経, 40(2), 88-100.
- 39) 杉山登志郎 (2005) : 教師のための高機能広汎性発達障害・教育マニュアル. 少年写真新聞社.
- 40) Tager-Flusberg, H. (1994) : Autism nature diagnosis and treatment. 野村東助・清水康夫監訳, 自閉症—その本態, 診断および治療—. 第5章心理言語学的視点による自閉症児の言語発達の考察. 日本文化科学社.
- 41) Tager-Flusberg, H. (1993) : Understanding other minds. 田原俊司訳, 心の理論 - 自閉症の視点から— (上) 第7章言語は自閉症児の心の理解について何を明らかにするのか. 八千代出版.
- 42) 高橋和子 (1997) : 高機能自閉症児の会話能力を育てる試み—応答能力から調整能力をめざして—. 特殊教育研究, 34(5), 99-108.
- 43) 谷口清 (1998) : 第5章注意. 松野豊・茂木俊彦編. 障害児心理学. 全障研出版部.
- 44) Tinbergen N. & Tinbergen E. A. (1984) : Autistic children new hope for cure. 田口恒夫訳 自閉症・治癒への道—文明社会への動物行動学的アプローチ—. 新書館.
- 45) 十一元三 (2004) : 自閉症論の変遷. こころの臨床, 23, 3. 星和書店.
- 46) 十一元三・神尾陽子 (2001) : 自閉症者の自己意識の研究. 児童青年精神医学とその近接領域, 42(1), 1-9.
- 47) 若林慎一郎・西村辨作 (1988) : 自閉症児の言語治療. 岩崎学術出版社.
- 48) 綿巻徹 (1997) : 自閉症児における共感獲得表現助詞「ね」の使用の欠如, 事例研究. 発達障害研究, 19, 2.
- 49) Watson, L., Lord, C., Schffer, B. & Schopler, E. (1989) : Teaching spontaneous communication to autistic and developmentally handicapped children. 佐々木正美・青山均監訳. 自閉症のコミュニケーション指導法. 岩崎学術出版.
- 50) 米澤好史 (2001) : 12章 記憶. 米谷淳・米澤好史編著. 行動科学への招待. 福村出版.